

消極的、觀念的、部分的、貴族的、出世間的、非國家的は獨り印支のみならず、日本も我日蓮教義より批判すれば亦此攝屬を免かれず、後の日蓮教義の特色の下に辨せん。三國佛教の異同比較概観略して是の如し。次に特に日本佛教の特色を述べん。(嗣出)

鎌倉殿中間答考 (承前)

當時問答の狀況を記して曰く「斯外伺候、大名諸士百司磨^{スル}肩^ヲ屈^レ膝^ヲ而列座^ス凡^ニ貴賤上下道俗男女來會^{スル}宛^カ如^ク雲霞門前成^ス群^ヲ良^ニ希代^ノ壯觀^{ナリ}也(略注十一左)鎌倉中の寺院は不^レ申及三浦三崎金崎六^ツ浦津々浦々近國は駿河甲斐伊豆武藏の寺々に申付僧俗男女聽聞御免の由所仰付也」(余寫本)

印師一度場に臨むや、獅子王の勢をなし、大乘の幡を差上、身には忍辱の衣を着し、手には妙法五字の利劍を提げ、正直捨權の弓を張り、邪正一如の矢を番ひ、爾前權門を打破り、智解辨舌縱橫無

盡、恰も富樓那の無礙辨の如く、大風の雜草を靡かすが如く、善く法華折伏破權門理を示し給ふ、而して三度の論難正に印師の勝利に歸するや、寺社奉行大膳大夫自ら宗牒を與へ四箇名言を許可す印師答曰く「四箇の名言今更御免無くとも、少しも憚るなし、先年高祖大士佐渡より赦免の時、放光寺時宗公より宗牒を下し置かる、(本化高祖傳下十一四、政中五二)今新に申す事御無用也」と。

又朗尊身は松葉ヶ谷草庵に居し給ふと雖も、此度の問答は前代未有の大事、初の仰の如く、些細の失過もあらば、忽ち流島刑架のみならず、一宗門の關ヶ原、宗祖末代、出現の本懷も唐捐ならしむと、乃ち老軀の御身を杖に扶けられ、群集の間にありて、問答を窺ふ、口には經文を誦し、心には諸佛菩薩を祈念し專念に勝利を希ふ、然るに幸なる哉、初中後印師の利となりしかば、喜悅満面、互に顔を合せし、嬉し泪に御法衣の袖を絞り給ひ踊躍して手づから、印師の履物を直し給ふ、印師驚き且つ固辭する事再三、世の諺にも七尺去つて

師の影を踏ます、一字の恩に舌を抜くと申す事さ（あり、何卒御免被下度と、云へども朗尊聽かず、曰く「日印今度の問答に勝を制せるは、汝自身の智慧才覺に非ず、全く我祖聖人の加護冥應にあらずんば、如何に兩三度の問難に利運を得べけんや、汝が身には大聖人の心靈宿れり、然らば師大聖人に對する私の禮なり、何の子細かあらん」と）（二寫本取意此下清水龍山聖人の評あり此事實の有無は統記所評の如くならん蓋し是れ記者朗尊の心事を付度して筆せる物歟）更に以下、少しく三書より得たる疑點乃至矛盾點を語らん、先づ小林師所持の寫本は、初論に徳川幕府の事、書中日蓮宗云の事ありと、余所藏の寫本にも亦日蓮宗云の事あり、師曰く「日蓮宗々號を公稱するに至りしは、明治九年新居日薩和尚に初まれり、其已前は日蓮法華宗と呼べり、然れば此稱、私に仕用せる者なりや」云云以上所論最も當を得たりと云ふ可き歟、然れども二者共に所謂無銘の書なれば、確實なる材料とす可からざるは勿論、史的價値の最も不徹底なるものと云ふべし、然らば靜師版本の所論必ずしも眞なりや、是れ亦

眞摯精密なる考究の要あり、前記の如く、靜師問答記錄、達師同略注共に、寛保元年開版なり、記錄者靜師の傳を案するに、初め池田治部公に師事し、文保二年戊午位師寂せらる、や、師二十一歳鎌倉に遊び、印師と師資の契を結ぶ、後印師桑梓に入らる、や、師は京都に入り、貞和元年四十八歳足利尊氏と計り、本國寺を六條に移し、印師より遺囑の立像尊、伊佐兩島の赦牒、安國論一卷、（宗門三師の靈寶と稱す）を邀へて、大法會を修す時に、光明帝聞し召され三位僧都を授け給ふ（佛統下三五三）由是觀之、元應元年は靜師年漸く廿二、三位僧都の位階無きは勿論、然るに三位と云ひ、又開版の時を示して、文應元年と云ふ、何ぞ矛盾の甚だしきと、先師は難せり、然れども、本國寺鼻祖靜師の記錄として傳はりし問答記、了義達師に至りて是を無下に捨去るに忍びず、多少作強付會の弊ありとしても、所謂本宗第四期文書宗論時代の必然的產物たる可し開版年月の如きも、章疏目錄には寛保とせり、從て記錄者三位僧都日靜の書とせしも何等疑點なし

又第一回問答の問者たる、十宗坊は余の寫本に依れば頭殿（執機高時歟）の持戒御師匠、誠に御最負の僧、高齡にて法然を祖となすと、第三回の伊羅護道日も八宗兼學の僧、禪と淨土を信じ、大唐迄も其名響けりと、然るに皆是れ相手を虚飾せる文字の如くにして、其の如何なる位置を有せし人物なりや予の詳にせざる所なり。

如上自家撞着の點甚だし、且く記して先輩諸賢の垂示を待たん、余先づ試に往昔の先哲に問訊せん別頭流記十三左十三曰く「予曾讀殿中間答再三識之拙議論之陋決非印上事又非日靜之筆」云又曰く「書中又言朗尊見印有勝利出而取履其乎哉妄誕至此」云云由是觀之靜師の記錄を讀破したる事明了なり、然るに版本靜師記錄には朗尊取履云云の記事全々無し、然らば即ち靜師所錄の問答記も一に止らず、そが内容の如きも、又一様ならざるか、達潮二聖共に時代を同じふすれども、別頭統記の完成は、享保十六年（皇紀二三九一）問答記の開版は、寛保元年（皇紀二四〇一）なれば、十年

後なりされば世流布の眞蹟を見たるに非ざる歟、又曰く「朗尊是時七十六歲雖老モタリ而意氣剛健宗門大事何譲門人シヤ」云云と難ず然れども、問答の翌元應二年七十八歳の寂也、故に印師に名代たらしめるも、一理あらん。尙年譜攷異に問尋せんか、攻異上廿七（舊本に依る新本に不見）「十二月北條高時命諸宗徒、與我宗徒ハシ杭論ハシ法師命日印爲對有利ト同下九左云「元應元年代朗師與諸宗僧論法義于鎌倉府事大有利殿中間答行于世」云云由是觀之年譜攷異は弘化四年（皇紀二五〇七）の作なれば、靜師問答記及び達師注も共に是認したるが如し。

上來問答を概論し了せりと雖も、其の結果として宗門の内外に表れたる問題に一言せん。先づ宗内に在りてとは、宗門一般通途の所談として、本國寺の所謂宗門三箇之靈寶たる、立像一体、安國論一卷、御免狀二通（註畫讚五左十二）を以て朗尊、印師に對し、三箇度の問答を謝し、最後臨終の時に譲り給ふと云ふ、古來の先賢、此間に何等の質疑あるを聽かず、親師傳燈鈔の如き、三ヶ靈寶付囑

の事に是非の所談あらざるより推すれば、是認したるが如く、行學朝師の如き、三箇の重寶を論せる點（本尊論史料）より觀れば、當時敵視せる本成寺派なりしが、是に對し何等の質疑を插みしを知らず、今又更に他流に求めん、本迹自鏡編下卷（合掌阿闍梨日授著）顯本法華宗品川本光寺云く「將檢考陣傳（所記門家列傳）書及陳門先哲（日年譜）以之駁議陳門妄傳（中略）永仁二甲午日印年三十一捨台宗始投身於朗師同五四酉日印歲三十四造立本成寺文保二戊午日印歲五十二月殿中間答起元應元己未九月十二日殿中間答畢日靜親聽即席記之同年朗師付屬元祖奮跡松葉谷草庵並三箇靈寶於日印而日陳徒妄傳スラ日印用三箇靈寶以送本成寺者予カ曰日印若住我意於實送此珍于本成寺則違背朗師素意之大罪人也何日印如是事蹟カ之有乎同二月二十一日朗師於本土寺入寂日印造立本國寺以三箇珍爲之此寺靈寶物（已下略）是れ又問答及び靈寶讓與を認む。次に更に問題の外的方面を論せん、宗祖建宗已來自主獨立不屈不撓の御精神を鼓

吹せられ、慘憺たる歴史を有し、逆境の裡に生ひ立てる宗門、威武權勢に怖れず、頑冥と世に評され、遂に治安の破壊者として睨まるゝに至れり、祖滅後二陣三陣の猛者、陸續と教線を張り、唯一經王の大權を發揮し、權小偏龜群經の折伏逆化、幕地に權邪を突く事益々急なり、權門の道俗、何ぞ憎心を起さざるを得ん。中にも德行清雅なる朗尊松葉ヶ谷に堂々法陣を張ると共に、其の謙德の下に集り、一騎當千の法器、朗尊九鳳の如き有り上記の「鎌倉殿中間答」果して眞なりとせば、宗門發展史上、宗祖滅後に於け第一問題たり、此に於てか當時の政治的方面、又は思想的方面より研究の歩を進め、宗運盛衰消長史上の、確實なる斷案を得ざる可からず。

吾人敢て等閑に附したるには非ざれども、悲い哉淺才薄識是の舉に出づる能はず、然りと雖も教義の無形、人物の有形を知ると共に、教義は究め難く人物は究め易く、從て古來より、教徒の日常言動の間に顯れたる、史的研究は、吾人の最大急務

なりと思惟せり、近來文運の發達と、人智の開明とは、完全なる一大人格を要求す、是れ易より難に達せんとする、捷徑なればなり。

希くば識者諸賢千猫中一鼠の駄稿に、一縷の光明を與へ給へば、雷に大旱の雲霓に於ける比のみにあらず、「又如一眼之龜值浮木孔」徒に余一人の幸なるのみに非、是れやがて宗門の慶事なり。

日本佛教史より觀たる

日蓮上人

堀 龍 淳

(一) 序 言

大戰後に於ける世界思潮の惡化、人心歸趣の失墜は和國の岸へも漂ふて渺からぬ動搖と恐怖とを與へて居る。今の裡に根本的救濟策を怠つたならば、死地に陥らしめる程それ程、赤熱化の暴威を逞ふして居る。此の際此の秋靜かに日本佛教史を繙いて法華傳來の聖者、上宮、傳教、吾祖の三大

偉人の面影を想起したならば蓋し感慨無量なるものがある。而も今年は太子の千三百年大師の千百年忌辰と吾祖降誕七百年の嘉會正當である。何と不思議な廻り合せではないか。更に其の三聖共に「眞俗一貫」「王佛冥合」を以て經國の理想要諦とされたと云ふ共通點を見出す時甚深の意味が存すると思ふ。

今私は此の三聖あつて始めて日本佛教としての光輝と特色が存するものであり、更に吾祖の出現によつて其完成結論に到達し臥龍点睛以て生命を賦與したものであると云ふことを史的過程を無視しない限りに於て、其大要を論じて見たいと思ふ。

(二) 聖德太子の佛教觀

太子誕生の年代異説や南岳化身説等に就ての校量研究は今の、所論でないから後日に譲るとして直ちに太子の佛教觀に入ることにする。太子の佛教觀は一言以て之を謂はゞ十七憲法及三經疏に於て盡きて居る。

十七憲法は大体上儒教道德の色彩が濃厚であるが